



Title	漢字の効果的学習法に関する授業報告
Author(s)	北川, 美香
Citation	大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究. 2014, 12, p. 17-21
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50784
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

漢字の効果的学習法に関する授業報告

北川 美香

【要旨】

本稿は2013年度春学期に大阪大学日本語日本文化教育センターの授業「漢字研究」で学生の犯したミス进行分析し、それを踏まえて試行した幾つかの漢字学習法を報告し、効率的な漢字教授法を考察するのが目的である。今回の授業は日本語能力試験N1合格を目標に掲げていたため、ある程度の漢字力を備えた学生が集まった。しかし、漢字圏の学生では、簡体字などの異体字との混同によるミスが目立ち、非漢字圏の学生では、漢字の字形そのものがしっかりと身についていない学生が少なからず見られた。漢字圏の学生には、簡体字・繁体字・日本漢字の違いを明確にするのが重要である。一方、漢字の字形に関する知識が不確かな学生は視聴覚を刺激したり、語呂合わせを用いたりする方法が効果的であった。最初のプレースメントテストで誤答の種類によって学生を分別すれば、その後の授業展開が効率的に行えるだろう。

I 序

2013年度春学期に大阪大学日本語日本文化教育センターの授業「漢字研究」で、日本語・日本文化研修留学生コースおよび短期留学日本語日本文化特別プログラムに所属する様々な国籍や漢字学習経歴を持つ学生16名に漢字を教える機会を得た。当センターにおける「上級漢字研究」授業に関する報告は今までにも行われているが¹⁾、私は①授業中の漢字書き取り練習、②毎回授業冒頭に前回の授業内容を確認するために行う復習小テスト、③期末テストで学生の犯した誤答进行分析し、それを踏まえて試行した幾つかの漢字学習法を報告したい。そして、今後の効率的な漢字教授法を考察してみたい。

II 受講生

まず、私の担当した受講生の構成をここで確認しておこう。

日本語・日本文化研修留学生 12名 韓国（5名） ブルガリア、トルコ、ハンガリー、
インド、ルーマニア、スウェーデン、タイ（各1名）

短期留学日本語日本文化特別プログラム生 3名
カナダ、タイ、中国（各1名）

聴講生 1名 イタリア

III 授業内容

この授業は日本語能力試験N1合格を目標とする授業である。テスト対策のみを考えれば、漢字を書く練習をする必然性はないが、今後学生達が様々な場面で日本語による情報のアウトプットを行う重要性を鑑みて、漢字を書く演習も取り入れている。特に留学生が間違いやすい同音・

同訓字の意味や使い分けを学習の中心に据えた。ただ、漢字の説明と練習ばかりでは単調で味気ない授業になってしまうため、15-20分程度で読み切れる新聞記事・コラムを毎回取り上げた。実際に常用漢字がどのように文章中で用いられているかを体験したり、漢字の確認したりするだけでなく、最近の日本事情も感じてもらえるように様々なトピック——政治、料理、流行語、教育、旅行など——をカバーできるように気を付けている。

毎回、授業の冒頭では前回学習した漢字の復習テストを行い、どのような誤答が多いかをチェックして、本人に注意を促し、かつその後の授業に生かせるように図った。

IV 誤答とそれに対する対処法

1. 同音異義字間での取り違い

まず、目につく誤答はやはり同じ音を持つ漢字同士が混乱してしまうために発生するミスである。「標識」を「表式」と書いてしまうのはこの典型例だろう。

このような間違いに対しては、従来から漢字教育で行われている正攻法が役に立つと思われる。日本語教育書の漢字編で必ず述べられているように²⁾、六書のような漢字の成り立ち・用法を説明したり、本義を踏まえて意味を解釈したり、部首や構成部分を考えたりする方法である。漢字の中に部首や音符を見つけられるようにして、そこから音や意味を類推する練習が勧められるだろう。

授業内で実際にあった例を取り上げると、「効」と「郊」を取り違える学生が数名いたが、旁「ちから」は「力を用いた動作に関する意味」を表し、「おおざと」は「地域や集落」を表すと説明し、それぞれ「動、助」「都、郷」などの例を挙げれば、簡単に違いが理解できた。また同時に、「交」は足を組んだ人を正面から見た形から生まれた象形文字で、「まじわる、つきあう、ゆきかう」の意があり、同時に「コウ」という音を表すという知識を添えた。そのうえで同じ単位を含む「校・絞・佼」の意味や音を紹介すると、組織だった漢字理解につながる。これは一つのテーマについて派生するキーワードをどんどん書き出して覚えるメモリーツリー記憶術と似通っており、他の漢字の習得にも応用できる。連想法を用いるため、記憶にも定着しやすく、学生たちにも大変有効だと好評であった。やはり、システムティックに漢字を整理していけるという点で、これらの正攻法は一定の効果が期待できる。漢字教育の上では欠かせない手法と言えるだろう。

2. 簡体字との取り違い

更に、漢字圏の学生たちはかなり漢字の知識があり、漢字を書き慣れているため、日本人と同じくらい自然な字体で漢字を書くことが出来るのが常だ。しかし、彼らにありがちなミスとして、ついつい簡体字や繁体字を書いてしまう点が挙げられる³⁾。自国で日常使用している文字であるから、このような間違いが起こるのはある意味仕方がないだろう。授業中にこの種のミスが見つければ、その都度注意を喚起していた。しかしながら、期末テストでの誤答を分析すると、普段からも簡体字をよく書いていた中国人学生は10個のミスのうち半数に上る5個で簡体字を用いている。韓国人の中にもその種の異体字を書いてしまった者が数名いた。

このようなミスをどうやって防げばよいだろうか。簡体字、繁体字、日本漢字の対照表を配布して注意を促すのが効果的と考えられる。誤用例を並べておけば、弁別する力も付くだろう。

また、教師が簡体字、繁体字を頭に入れて指導を行うことも必要だ。ただ非漢字圏の学生が同じクラスに混じっている場合に、授業内で簡体字に深く触れるのは不適切だろう。

3. 漢字の字形そのもののミス

しかし、上に挙げた対策だけでは十分と言えない。今回担当した学生たちは日本語学習歴が比較的長く、日本語能力試験N2程度以上の日本語運用能力を皆すでに身に付けている。それでも中には、日本人成人では犯さないようなミスをする非漢字圏の学生もいる。たとえば、「集」という漢字の縦横の棒が何本ずつか分からなくなったり、偏と旁を左右逆に書いてしまったりするのがその例だ。

では、期末テストにおけるミスの中で漢字の形状ミスによる誤りがどの程度の割合を占めるのかを分析してみよう。ここでは、白紙解答はミスの種類を判断出来ないため、計算から除外している。

期末テストにおける間違った字形の漢字が占める割合

国籍	間違いの総数（白紙解答を除く）	誤った形状の漢字数	割合
漢字圏			
韓国人 A	7	0	0%
韓国人 B	4	0	0%
韓国人 C	12	1	8.3%
韓国人 D	8	1	12.5%
中国人	12	1	8.3%
非漢字圏			
イタリア人	4	3	75%
タイ人 A	3	2	66.7%
インド人	13	6	46.2%
トルコ人	5	2	40%
タイ人 B	8	3	37.5%
カナダ人	6	1	16.7%
スウェーデン人	2	0	0%
ハンガリー人	2	0	0%
ルーマニア人	1	0	0%
ブルガリア人	1	0	0%

漢字圏の学生では漢字の字形そのものを間違える確率は全体としてかなり低いことが分かる。彼らの場合は同音の漢字との取り違いや簡体字との混乱がより大きな割合を占める。

一方、非漢字圏の学生の場合、常用漢字は完璧にマスター出来ていて、字形を全く間違わないグループ（この学生たちはテストの点数そのものが非常に良く満点に近い）と、漢字の形がもう一つきちんと掴めていないグループにはっきりと分かれている。これは日本語・日本文化

研修留学生か、短期留学日本語日本文化特別プログラム生かの違いには関係しなかった。

このような間違いは日本人であるならば、小学生が犯しがちだと思われる。そのため、小学校では漢字をいくつかの部分に分けて、一つ一つを別々に書いていく分かち書きの練習をしたり、絵を用いて視覚に訴えながら説明したり、漢字の書き方歌を教えたりしている⁴⁾。このような方法を併用することで、子供たちは目や耳を使って楽しみながら漢字が覚えられるようだ⁵⁾。成人に達しているような本センターの学生には小学生に用いられる方法は「子供っぽい」とプライドを傷つけられた印象を抱かせる危険性もあるだろう。しかしながら、上に挙げた方法は認知科学における記憶の4過程を上手く使っている点からも科学的に考えて効果が高いことは明らかだ。イラストや絵で漢字を提示することは、連想法・イメージ法と呼ばれ、視覚を使うために印象が強くなる。イメージを覚えこむ「記銘」の働きが上手く刺激される。また、唱えて覚える方法は声を用いて、聴覚からの刺激を受ける。感情・感覚を動員して関連付けを行うのは記憶を確かにするよい方法である。これは記憶法の面から見ると、刻み込まれた物を忘れないようにする「保持」の機能とも関わってくる。

更に、川口義一氏は漢字を見て、そのパーツから自分の好きなストーリーを作り出していくことは漢字を覚えるのに役立つのみならず、漢字学習への意欲を掻き立てる要因にもなるため、自分なりのカードを作ることを勧めている⁶⁾。これはストーリーを含む記憶、いわゆるエピソード記憶になり、丸覚えの苦手な学生に向いている。漢字の形がなかなか覚えられない学生に紹介する価値があるだろう。

以上を発展させた手法として、漢字の苦手な日本人中高生に人気のある語呂合わせ漢字記憶法がある。たとえば、「憂鬱」の「鬱」は「リンカーンがアメリカンコーヒーを3杯飲んだ」と唱えて覚える⁷⁾。人間の記憶に取り込みやすい形式に上手く変換されており、記憶する量が減って、脳の負担が軽減されるのがツボである。すぐに忘れるかどうかは、記憶が形作られた直後、コード化される瞬間と大いに関係があるという⁸⁾。この方法は先程挙げたストーリーを含む記憶となるので、なかなか忘れにくいと感じられる。個人的には面白い試みで、漢字への興味が増すなら、一考の余地があると思う。日本人成人でも、このような言い回しのおかげで今まで何年も書けなかった漢字が身についた例がある。その場合、語呂合わせ法も十分意味があるだろう。アルファベットのような表意文字では行おうことのできないある種の知恵・文化とも呼べるかもしれない。日本の歌謡曲の中にもそのような漢字に意味を与える歌詞が昔からあり、日本文化の伝統的傾向とも言えるのだろう⁹⁾。世界記憶力選手権で優勝を重ねたドミニク・オブライエンも数字を言葉に置き換えてイメージを作る数韻システムや数字を言語化するドミニクシステムを紹介している¹⁰⁾。同様に漢字に意味を与えてイメージを膨らませるのは記憶を容易にする優れた方法である。

当センターの学生は、日本的詰め込み教育法に違和感を抱くのか、もともと漢字に対する興味が十分に備わっているせいか、このような語呂合わせ法は漢字の本質とはかけ離れた邪道と感じる学生もいる。この辺り、点数さえ取れば本質などどうでもよいという主義の日本人中高生とは真逆の立ち位置にあるのかもしれない。しかし、非漢字圏で余り漢字が得意でない学生には画期的な方法だと感謝してもらえたことも付け加えたい。

V 結論

当センターに所属する上級レベルの学生たちは、一定以上の漢字能力や漢字学習意欲を備えているため、日本の受験教育に見られるようなテクニックに走った指導法よりも、オーソドックスに漢字のつくり・成立を考えさせる指導の方に軍配を挙げがちだ。

しかし、漢字圏の学生と非漢字圏の学生では漢字の間違え方も異なっている。漢字圏の場合、漢字そのものの形をミスすることは稀だが、簡体字と混乱したり、同音の異なる漢字と取り違えたりする危険性がある¹¹⁾。逆に非漢字圏の学生の中には漢字の基本的なつくりをマスター出来ていないレベルの学生が含まれている可能性がある。

漢字圏と非漢字圏で学生を分けて、前者には簡体字との違いを詳しく説明するのが漢字学習に効果的である。また、後者は常用漢字の字形をほぼパーフェクトにマスターしているグループと常用漢字の形状に不安の残るグループに分別するのが効率的だ。常用漢字が身につけている学生にはよりレベルの高い漢字学習を勧めるべきであるし、字形があやふやな学生には小学生に効果が上がるような「歌って覚える方法」や「語呂合わせ法」を試したい。これらは記憶に残りやすく、練習にも取り組みやすい。科学的に考えても長期的記憶に残りやすい利点がある。このような方法を無駄に使わないのは勿体ない。

本人の自己申告や自主的な選択にとどまらず、最初に漢字のテストを行って、誤答パターンからクラス分けをするのは学習効率の上がる方法ではないだろうか。

注

- 1) 一例を挙げると、波多野吉徳「上級学習者に対する『漢字』授業の試み」『大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究』第10号、2012、pp.57-67。
- 2) 国際交流基金『日本語教授法シリーズ3 文字・語彙を教える』、ひつじ書房、2011、p.52や武部良明『漢字の教え方』、アルク、1989、p.163参照。
- 3) 日本漢字の旧字体に近い字を書く韓国人学生もいる。
- 4) 下村昇『下村式 唱えて覚える漢字の本』、偕成社、2002。
- 5) 石井勲『絵で覚える漢字の本』、ポプラ社、1989。
- 6) 川口義一他『漢字指導アイデアブック』、創拓社、1995、p.67。
- 7) 根本浩『書けない漢字が書ける本』、角川SSコミュニケーションズ、2009。
一例を挙げると「鼠 ウッス、レレレのおじさん4匹のネズミ捕る (p.48)」。
- 8) ダニエル・L・シャクター『記憶と脳の7つの謎』、日本経済新聞社、2002、p.43。
- 9) ダークダックスの『絆』には「糸へんに半分と書いて絆と読みます」という歌詞がある。アン真理子の『悲しみは駆け足でやってくる』という歌には「明日という字は明るい日と書くのね。あなたと私の明日は明るいね。(…) 若いという字は苦しい字に似てるわ。涙が出るのは若いというしるしね。」とある。いずれも漢字に上手く意味を持たせている。
- 10) ドミニク・オブライエン『記憶に自信のなかった私が世界記憶力選手権で8回優勝した最強のテクニック』、エクスナレッジ、p.106, 113。
- 11) 例えば、漢字圏のある学生は小テストで「時刻表」を「自国票」、「現像」を「原像」と誤答した。それぞれの単語の意味を説明すると、容易に正答にたどり着くことが出来た。漢字の形そのものにはミスがないので、漢字の書き方を注意する必要は全くなかった。

(きたがわ みか 本センター非常勤講師)